

## シベリア抑留体験者の訴え

新潟県 高橋 吉郎

第二次世界大戦におけるシベリア抑留者問題は、歴史上かつてない、人道上許し難い悲惨にして残酷な結果を生じたものである。しかしながら巷間ではシベリアの捕虜と言われているのである。実に屈辱的な不名誉な言葉で言われていることは誠に残念至極である。

そこでシベリア抑留体験者の一人として真実を語るべく、平成五年度から七回にわたり、財団法人全国強制抑留者協会発行のシベリア抑留体験記を投稿してきたものである。

戦争中はとにかく、天皇陛下の命により戦争が終結し武装解除を受け、祖国へ帰還すべきものを人ざらいのごとく不法に抑留され、酷寒のシベリアで強制労働の苦しみを受けたのである。天皇陛下の耐え難きを耐え忍び難きを忍びという玉音を身をもって体験したの

はシベリア抑留者であったと言っても過言ではないのである。

我々の手記は、小説ではなく血の出るような悲壮な叫び声なのである。前にも記述してあるところであるが、シベリアの凍土に眠る戦友はもちろん、その肉親の心情は全く察するに余りがあり、深く冥福を祈るものである。シベリア抑留者で、辛うじて夢にまで見つけていた祖国に帰ることができても安心と同時に他界された戦友も計りしれないのである。

入隊から軍隊生活へ

昭和十八（一九四三）年十月五日、会津若松東部二十四部隊に召集を命ずるの赤紙を、新潟警察署勤務中これを受けたのである。弱冠二十四歳の青年警察官で、勤務の実務一年余りの新任で右も左も分からない未熟者であった。当時既に米国の飛行機が飛来して来て警戒警報がかかり、鉄カブトをかぶり非常呼集に参加したのであった。非番も当番もなく、署長は常在戦場と訓示し、毎日緊張して勤務していたのであった。国民

服に必勝と署員の寄せ書きを書いた日の丸の国旗をい  
ただき、たすきにかけて万代橋から新潟駅へと送ら  
れ、列車の窓から手を振って別れたのがついこの間の  
ようである。郷里の鎮守様で祝出征の幟のぼりが立ち並ぶ中  
で村人に挨拶をし、小学校で生徒の前でも挨拶をし  
て、十日町で日の丸の小旗を万歳万歳とちぎれるほど  
振る村人に送られて、元氣良く勝って来るぞと言っ  
て列車に乗り出発した。列車の窓から手を振り、おそら  
くこれが最後の別れであろうと思うとぐっと胸が熱く  
なったのである。会津若松へ着き旅館に一泊し、翌十  
月六日無事入隊した。あずきめしを食べさせられて四  
種混合の注射を打たれて二週間おり、昭和十八年十月  
二十日、満州東安第一三八七部隊に転属したのであ  
る。

既に満州は零下となり、水溜りは氷が張っていた。  
見渡す限りの枯れ野が続き、シベリアの方から北風が  
ビュービューと吹いて、木一本もない殺風景な所に平  
屋の屋根だけが見えるモグラの兵舎があり、入居し  
た。縦十五メートル、横六メートル程の中央に二メー

トル幅の板敷きの廊下があり、その両側二メートル位  
が一段と高い板敷きとなっていた。板の上にコリーヤ  
ン設で編んだアンペラのような敷物があり、各人の面  
積は畳一枚程であった。その上にゴツゴツした布袋に  
乾草が詰まったマットレスのようなものが敷いてあっ  
て、各人毛布六枚がきちんと重ねてあった。これが  
我々兵の起居する場所であった。起床、就寝ラッパが  
鳴り響き、軍隊らしい雰囲気もするのであった。廊下  
に机が置いてある。これは引出しのない長方形のもの  
で、食事分配用のものであった。各人がマットレスの  
上であぐらをかいて食事をするのである。

モグラの兵舎に入った翌日、洗濯をすることになっ  
た。兵舎の裏手の流れるともないよどみの水溜りでは、  
既に張っている氷を軍靴で踏んで割って、氷の上に衣  
類を広げて石けんをつけて洗うのであった。兵舎前の  
物干場で洗濯物を広げてこれにかけると忽ち凍り、板  
のようになった。みんな手を赤くしてハーハーと息を  
吹きかけながら作業していると、いきなり「その兵  
隊内地へ帰れ」と怒鳴りつける声がある。怒鳴られた

戦友は、ただオロオロするばかりであった。部隊長であった。見つけた者は「敬礼」と言わなければならぬのである。昨日来たばかりの右も左も分からない初年兵である。これからが思いやられたのである。

案の定、厳しい初年兵教育が始まったのである。筆者は朝礼の際、詰襟の軍服のホックが二個のうち一個が外れており、島田初年兵は第一ボタンが外れていたというので、班は兵長に対交ビンタを取るよう命ぜられたのである。兵長は島田君に、貴様が先にビンタを取れと言う。彼は平手で頬をなげるように形ばかりのビンタを取った。次に貴様だと言うので、心を鬼にして許せよと島田君の頬を思い切りビンタを取った。彼は顔をしかめて、うらめしそうな顔をした。兵長がよし今度は俺が模範を示すと言って大きな平手でビンタを取った。彼はころころと転がった。起きてこいと言って再びビンタを取るのである。これはひどい、明らかに暴行である。我が国刑法で禁ぜられているのであるが、軍隊ではまかり通っていた。入ったばかりの初年兵は、朝起床ラッパが鳴るとはね起きて、軍服を

迅速に着て六枚の毛布をキチンとたたみ、素早く屋外に整列しなければならぬのである。入って早々の出来事であった。

初年兵教育は普通三カ月であるが、我々は四カ月余りであった。酷寒零下三十度の東満の荒野で野を駆け巡る演習は、さすがに泣く子も黙ると言われた関東軍で、猛烈を極めていた。初年兵教育もいよいよ本番に入った頃、屋外で突撃訓練で銃の先に帯剣をつけて匍匐訓練をしたところ、剣鞘の中に雪が入り、帰營して錆びつくので銃についている細い鉄棒の先に布切れをつけて剣鞘の中に入れたところ、布切れが外れ鞘先に残ってしまい出ないのである。既に就寝点呼が来る時間となってしまう。剣を無理やりに押し込んで点呼を受けたところが、点呼が終わると班付兵長がやって来て、帯剣をよこせというので渡すとなかなか抜けない。貴様と言って帯剣の鞘がついたままでいきなり頭部を三回殴打されたのである。目から火が出るといわれているが、この時は目の先がチカチカして痛いのを乗り越す程の苦痛であった。叩かれたあと班付上等兵

のところを持ってこいと言われてこれを持っていくと、彼はドライバーでネジを回すと剣鞘の中の布切れが簡単に出てきたのであった。上等兵はよし持って行けと言うので、有り難くありましたと言って帰ろうとすると、待てと言って、ビンタを二、三回取って帰れと言ったのである。踏んだり蹴ったりとはこのことであつた。

また、ある朝トイレの中で泣く声があるので、どうしたのかと立ち止まっていると、初年兵で妻子もある召集兵の大久保君が、彼は既に三十歳になつていたが、出て来て筆者に、見てくれ、こんなにされてしまったと言って頬を手で押さえ、痛くて飯が食えないと言つていた。見れば頬が腫れ上がり充血している。明らかに傷害を起こしている。どうしたのかと尋ねると、入浴した帰りにタオルを針金に掛けるのであるが、隣の戦友と一線に揃わなければならぬがわずか三センチ程下がつていたとのことで、班付上等兵にビンタをしたたか取られたとのことであつた。男泣きするほど殴打せずともよいではないか、と行き過ぎた初

年兵教育を疑問視せざるを得なかつた。そして筆者は軍隊の粗暴さにすっかり嫌気になつてしまつたのである。このようなことでは命を捧げて出征した意味もなく、強固なる団結をもつて祖国の防衛に当たる軍隊として任務が遂行できるはずはないと思つたのである。

銃後から慰問袋が送られて来た。班付上等兵に何を立てたら、飯盒で煮て食べるという指示であつたので、日曜日に飯盒に入れてベーチカの焚口に置いて就寝点呼を受けたところ、点呼に回つて来た週番の士官将校が見つけ、班長が呼びつけられて、おそらくビンタを取られたのであろう、顔青ざめ目を怒らせて班に帰り、全体責任であるとして、就寝前、正座せしめ長時間にわたる制裁であつた。飯盒に入れて煮て食べると言つても石炭や粉炭で火力が上がらず、焚口でないと煮えないのである。週番士官は飯盒は天皇陛下の人類兵器であると言うのである。それならば平素使用をさせなければよいと思うのである。ビンタや私的制裁は日常茶飯事であつた。実に粗野で粗暴であつたのである。些細なことにことごとく天皇陛下を持ち出して

階級的な差別をし、冷酷な兵隊地獄の場となっていたのである。心の豊かさが失われ、美しい人間性のかけらも見られなくなっていた。我々がシベリアに抑留され、連軍を見ると、ビンタは厳しく禁止されており、敬礼も直屬上官でなければ行われていなかったのである。既に精神的にも近代的になっていた。

初年兵教育に行軍が行われた。満州の三寒四温のはっきりしてきた十一月頃であった。大正時代の陸軍の完全装備は背のうが八貫目（二十キログラム）であったが、筆者の初年兵当時の軍装はやや軽く、それに帯剣、鉄砲の弾を着装し歩くので相当の重労働であった。この軍装をして一時間四キロを歩くのである。往復二十キロ行軍であった。南吳道湖という所まで行き一時間休憩して来たのであった。もう夜七時頃となり、みんなへとへとに疲れてぐっすり眠ってしまった。幸い筆者は軍靴のほこりを払って整頓していた。部隊長が巡視して回ったと見えて、翌朝朝礼の前に、夕べ軍靴の手入れをしない者は表の広場を裸足で駆け足をせよ、わしは軍靴の裏をなめさせられたこと

がある。と叱っていたのである。幸い筆者は我が意を得たりとしていたのである。表は凍土となっていた。

慰問袋のマカローで飯盒事件以来すっかり目を付けられ、態度が悪いといって日曜日に意地の悪い班付上等兵に長時間前支えさせられ、貴様は地方では巡査でいばっていたが軍隊ではそうはいかないと、ことごとく意地悪く辛く当たるのには参ってしまった。ある朝、朝礼の際卒倒して医務室にかつぎ込まれ寝台の上で寝かされた。枕元で「こんなにまでせずとも」と言う声が聞こえた。あとで分かったが、それは衛生下士官の軍曹であり、警視庁の警官から召集になって来た人であった。関東軍は日曜日になると酒保品として甘味品が支給されるのであるが、衛生軍曹は時々ヨーカンや勝どき餅などを持って班に来てくれた、そして班内の班付兵長、上等兵などの教育助手をならみつけて帰って行くのであった。地獄で仏に会ったようであり、今でも有り難く忘れられないのである。

しかし軍隊と警察は仲が悪く、事ごとに辛くされ、感情的となり、すっかり軍隊が嫌になってしまった。

従兄弟達は陸軍士官学校を出て将校になったり一年志願で将校になっており、筆者は補充兵であったので警官になったが、我が国の軍隊の中に入って、これではとても戦いには失敗すると思ったのであった。やがて一期の検閲も終わり、下士官志願をする者や一年志願で将校を目指す者や憲兵志願をする者が出て、いよいよ初年兵教育が終わる頃、憲兵志願をしないかと同年兵が誘って来た。筆者は険しい顔になって、俺は警官から召集になって来た、あくまでも警官であると、きっぱり断ったものである。こうして初年兵教育も終わり、一ツ星が二ツ星になり、陸軍一等兵になったのである。

昭和十九年二月末日をもって初年兵教育が終わり、いよいよ本番たる歩哨任務に就くことになったのである。

三月一日から西東安の貨物廠に分遣隊となつて出発した。軍曹一人、上等兵二人、一等兵六人、合計九人の分遣隊であった。これは西東安の軍用列車が通過する所の貨物の駅で、糧秣を列車から下ろし集積する作

業は満人のクーリーや徴用労務者でやっていたが、我々はこれらの集積されている多くの糧秣の警戒監視が任務であった。日曜日以外は近くに駐留している部隊が終始糧秣受領に来るのであった。衛兵所は通用口の門のそばにあった。我々歩哨の六人は二十四時間交代勤務で任務を遂行していたのである。分遣隊長の軍曹は衛兵司令であり、上等兵二人は歩哨係として歩哨の任務を遂行する指導監督であった。僅か九人の分遣隊で、厳しい初年兵教育から解放され一人前の兵隊となつて仲良く任務を遂行していた。

三月に入ってもまだ零下二十度の夜間勤務は身にこたえた。防寒帽が吐く息で白くなり、サンタクロースのじいさんのようになる。動哨はよいが、立哨に立つ場所は貨物を下ろす場所で一時間交代で立哨するのである。一時間がとても長く感じた。銃に剣をつけて立哨するのであるが、月夜の晩などは剣が月光にキラリと光り緊張した。ある夜の深夜、急に下腹がキリキリと痛み、耐えられなかった。百メートル程の所に衛兵所があるので戻り、腹痛を訴えたところ、衛兵司令は

休めというので休憩室で横たわっていた。衛兵所は石炭が赤々と燃えて暖かかったのである。身体が暖まると痛みも止まり、うとうとしたところが、いきなり起きると言われたので起きると、ビンタが飛んで来た。貴様、腹の痛い者がイビキをかけるか、と言うのである。そして再び立哨したのである。憤懣やるかたなしであった。衛兵司令はストーブの燃える中でぬくぬくとしている、歩哨は零下二十度の所で警戒の目を光らせているのである。なぜ、治ったようだ、立哨せよと言えないのか。部下が反感を抱くような我が国の軍隊が戦いに勝てるはずはないと痛感したのであった。人間性の豊かさが失われており、冷酷な貧しさが充満していたのである。

昭和十九年三月から同七月までの五カ月間分遣隊の歩哨勤務であったが、四月の末から五月にかけて待望の満州の春がやって来た。枯れ野の荒漠たる原野が一面の花園と変わったのには驚いてしまった。暖かい南風が爽やかに頬をなせて行く。雁や白鳥、鶴などの渡り鳥が、よどみに凍結した魚が白くなって浮いている

ものをついばみに飛来してくるのである。雁の大群が空も黒く覆い尽くすように来るのであり、また、鶴などは人間を見たこともなく、巢籠もりをして、飛び立とうともしないで首をもたげて、ようと挨拶をするような素振りであった。早朝遠く友軍の起床ラッパが鳴り響き、実にのどかであった。遠くで満人の結婚式が行われ、珍しい音楽を奏でているのである。

昭和十九年三月から五カ月間の西東安貨物廠での警備歩哨の任務を交代し、東安の原隊に帰り、今度は東安の貨物廠で、これは貨物廠の本部とも言うべき所であったが、経理部の将校が多勢詰めていた事務所の門番とも言うべき所で、日勤で敬礼ばかりしていればよい所であった。これまでの二十四時間勤務が日勤となり楽であった。若いなりたての将校に敬礼の態度が悪いと注意を受けた。心の中で青二才がと思うのが表に現れるのであろう。ここでは程度の低い古年兵と二人勤務であった。彼はずっと長くここで勤務しており、古年兵で先輩ぶっているいろいろと指示するのであった。我々は将校の当番兵のようなものであった。当直将校

の床をのべたりした。寝台や毛布は素晴らしい特級品が用いられていた。これらひとつ見ても、当時の我が国の軍隊では将校が贅沢三昧をしていたことが推察できるのであった。我々がシベリアに抑留された際、ロシアの労働者がヤボンスキーはクーシャチばかり考えてマシナーを作ることをしなかったので負けた（日本人は食うことばかり考えて機械を作ろうとしなかったから負けた）と言っており、実際その通りであったと思っている。軍人精神五カ条の最後に、一つ軍人は質素を旨とすべし、という勅諭があるが、これに反していたのである。おごる平家久しからず、であった。我が国の銃後の国民が必死になって不自由をして勝つためだと配給で耐えているのに、国民の心情とはかけ離れていたのである。特に満州ではすべてが満ち足りていた。もともと、満州に駐留する関東軍六十万余が五カ年過ごせるといふ、膨大な糧秣が野積みされていたのである。

我が部隊は八月に入るとソ満国境に近い虎林に移駐することになったのである。虎林の夏は内地の夏より

酷暑でむし暑く、風はなく、虎林病が恐ろしい所であった。移駐すると耐熱演習が行われた、連日猛訓練であった。隣の虎頭はソ連の国境警備兵が見える所で、いつソ連軍が越境して攻撃して来るか分からない地点であることから訓練にも気合がかかり、熱が入った。全身が汗でぐっしょりとなり水が欲しく、のどから手が出るようであった。しかし虎林の水は煮沸しないと飲むことを禁じられていた。これを聞かずに飲むといっぺんに下痢をしてしまい、なかなか治らないのである。筆者はこれを飲んで毎朝二回トイレに行くようになってしまったのである。この後遺症が残り、帰還しても冬になると苦しんだのである。

演習も一カ月程で終わり、今度は警官であったことから満州人の労務者を監視する任務を命ぜられた。貨物廠で働いていた現地人である。この任務は同年兵の警官であった者と二人で同年九月から昭和二十年三月まで続いた。満人は六カ月交代で働いていた。彼等に務めが終わったら新品の満服を進呈すればよいものを、当時の我が国の軍隊では差別してこれをしなかつ

た。徴用満人の中に、帰郷が近くなつて新品の満服が欲しくなり、ある日新品の満服の綿を抜き出し数十着を野積みの下に隠してあるのを発見した。休憩室に十五人程その場所に働いている者を呼び、顔色を見てみると態度から犯人が分かったので追及したところ自供したので、同じ満人である労務管理人に引き渡すと見るに耐えない折檻をするのであるが、自分一人でやると共犯の名前は絶対に言わなかつた。筆者は感心させられた。筆者がシベリアに抑留された際、警察官であつた者を摘発すればいわゆる反動摘発と称して早く祖国へ帰してやるとソ連側が言うと、いつの間にか警官をしていたことがソ連側に通じソ連側の将校の取調べを受け、お前は特高係をしていたのではないかと言われた。日本人は平気で戦友を売るが、満人の節操には日本人が深く学ばなければならぬと痛感させられたのであつた。筆者は外勤警察官で僅か一年の現職であつたので四年三カ月で帰ることができたが、特高であれば五年あるいは十年も長く戦犯として祖国へ帰れなかつたかもしれないのである。

昭和二十年五月頃、我々は虎林を引き揚げて再び東安に帰つて来たのであるが、別に何をしてもなく待機をするばかりであつた。その頃、ソ連のスターリンは日ソ不可侵条約を一方的に破棄してきたのであつた。しかし毎日が不吉な予感がするのであつた。農耕班は野菜などを作り、夜間演習と言つて各人に風呂敷を持たせ、満人のスイカを盗めというのであつた。苦々しいと思つていた。その頃司令部ではソ連軍を迎え撃つ作戦計画を練つていた。

昭和二十年八月八日、我が部隊は移動することになった。暑い夏の盛り、真つ昼間の貨車積みは汗だくだくであつた。部隊装備品を積んで、夕方、一年八月を過ぎた思い出の東安を出発した。どこへ行くのか我々には知らされなかつた。出発し、真夜中、ソ連外相モロトフが我が国に一方的に宣戦を布告して来た。翌朝牡丹江に着くと、戦闘帽に白鉢巻き決死隊が、将校は立ち上がり兵は座つてトロッコに乗り国境に向かつて前進して行つた。どうしたわけか我々は後方へと下がるのであつた。我が部隊は四平街の指導学

校に駐屯したのである。真夏の太陽がキラキラと照りつける中、上半身裸で貨物列車から部隊装備品を運んだのである。四平街駅では避難民を運ぶ列車が次から次へと黒煙を上げ、ポーポーと悲鳴を上げるがごときだった返していた。非常事態を呈している中を移駐準備は終了した。

それから一週間、我が関東軍とソ連軍とは死闘を繰り返していたのである。中でも牡丹江の戦いは激戦であったのである。不法に一方的に侵攻してきたソ連軍は、ドイツと戦いヒットラーを降伏せしめた勝利の勢いで虎林、黒河、ハイラルの三方から侵攻して来たが、二十五人乗りの戦車で侵攻して来て、途中で我が関東軍の決死隊に寸断され、牡丹江や我が軍の砲兵隊の援護射撃に遭い後退を余儀なくされたものであった。ソ連軍は、我が軍の猛反撃により前進を阻まれたソ連軍が後退して行くのと前進してきたソ連軍とが味方同士で撃ち合いとなり、大きな犠牲者を出したのである。牡丹江の戦いでは日本軍は勝っていたのである。一方黒河では、ソ連の空襲により甚大な損害を受

けたにもかかわらず、よくこれと抗戦していたのである。結局、わずかな兵力であった我が関東軍は、奉天（瀋陽）までソ連軍を引き寄せて包囲し一挙に撃滅作戦に出る方針であったのである。我が一三八七部隊も移動作戦を終わり出動命令を待っていたのであった。ソ連軍の戦闘機がやって来てドカドカドカと機銃掃射をする中で、いよいよ来るものが来たと覚悟を新たにしていた。

ところが忘れることができない運命の昭和二十年八月十五日、正午頃、ラジオから天皇陛下の耐え難きを耐え忍び難きを忍びと震えるような悲壮な声が流れて来たのである。我が国は敗北した、そんな馬鹿なことが、我々は皆安然とした。本当のことが分かってと全身から一挙に力が抜け、涙が頬を流れるのであった。我が国は負けた、どうしてと、皆悲壮な、ゆがんだ顔になって放心していた。戦いは終わったのだ。

市街地に駐留していたので、一般邦人の婦女子が兵隊さん助けてと入って来る。ソ連兵がマンドリン（自動小銃）を携えてウロウロと指導学校内へ入って来

て、我々の姿を見ると帰って行った。夜ともなれば、

ゴーゴーと三日三晩、戦車や大砲を引く牽引車がソ連軍に引き渡すため飛行場に集結して行く、戦わずして敵に引き渡すのである。こんな馬鹿なことになり、みんな祖国のために身を捧げる悲壮な決意でいたのである、ゲンコを振り上げて下ろすことができないのである。その悔しさ、残念無念さは体験した者でないと理解できないのである。やがて四平街の児玉公園の忠霊塔の前で武装解除を受けたのである。その時の残念な気持ちは今もお忘れることはできない。菊の御紋の付いている銃をソ連兵が乱暴に放り投げ、棒切れのごとく取り扱うのである。何が無敵皇軍なものか、父祖が血と汗で勝利をおさめた日露の戦いをむざむざと敵ソ連にだまし討ちされてしまったではないか、すべて当時の軍閥の思い上がりでこのような目に遭うのだと、筆者は残念でたまらなかつたのである。しかしこれも運命である、誰をや恨まん、運命に任せて天皇陛下の耐え難きを耐え忍び難きを忍び、ただ黙々と集結地、楊木林の我が軍の兵舎へと整然と歩を運んで行っ

たのであった。

ソ連兵のダモイトウキョウを半信半疑で聞き、一月の待機の後、同年九月二十七日、四平駅から黒河へと満鉄の貨車に詰め込まれ糧秣の上に起居し、黒河で一晩休憩して昭和二十年十月三十日、黒竜江をUSAのマークのついた鉄舟橋で渡りソ連領ブラゴエシチェンスクに着いたのである。もう夕暮れ迫るころであった。

もうシベリアは零下になっていた。焚き火をたいて車座になって、今晚はここに露營することになった。

そこは林の中で淋しい場所であった。火を焚くと不発弾がドカンと破裂し危険な場所であった。入ソしたばかりの土地であったので戦場となっていたかも知れなかつた。夜が更けるに従って寒さが身にこたえる。体の前面が温かくなると眠気に誘われ、背中が氷のように冷えている。くるりと後ろ向きになると今度は体の前面が冷たい。うとうとするが眠れない。そのうちに、部隊長殿、ソ連兵が来てピストルを突きつけられて糧秣を自動車ごとこっそりやられました、と報告

す。致し方がない、武器がないので隊長もそうかと言  
うばかりである。これから先が案ぜられるのであつ  
た。泥棒の国に入つて来てしまつた。

やがて夜が明けて輜重車に装具を積んで、太陽が出  
ると凍結が解けたぬかるみの道を、ヨイサヨイサと車  
を引く者押す者で、約一時間もかかりブラゴエシチェ  
ンスクの街に出た。石畳の道路は帝政時代からの道で  
立派な道であつた。敗残兵そのもののみじめな行列が  
通るのを見て、マーリンケ（子供）がヤボンスキーマ  
ツオカ、ハラシヨーマツオカ、バンザイとののしるの  
である。国際連盟において全権大使松岡洋右が連盟を  
脱退してモスクワに立ち寄り、スターリン首相の歓待  
を受け不可侵条約を結び、揚々として帰国したからで  
ある。子供までが我が日本の愚かさを聞かされている  
のである。子供は我々の体にまつわりつき、衣服のポ  
ケットに手をつ込んで何やかやと盗もうとしている  
のである。分隊長の篠原憲兵准尉は子供の頭をなげて  
やり油断しているときに大切な印籠を奪われてしまつ  
た。大変な国に入ってしまったのである。

やがて郊外の鉄道沿線に到着した。昭和二十年十月  
三十一日であつた。そこで各人の携帯天幕をつなぎ合  
わせてテントを張り、ここで露営することとなつた。

三日間滞在したのである。そこで我々の部隊に憲兵が  
合流したのであつたが、憲兵准尉が悲観論を言い始め  
たのである。我々をウラジオストクから日本へ帰す  
などとてもない話である、我が国日本は、ドイツ軍  
がレニングラードまで侵攻した際、日本武士道と称  
し、満州から不可侵条約を結んでいるとして糧秣まで  
ソ連に送つて助けてやっているのである、それにもか  
からずこれを裏切り一方的に満州にソ連は侵攻して来  
て我々を拘束している、すんなりと日本に帰すわけが  
ない、と言つていたのである。事実その通りだつたの  
である。

さて我々は十一月三日明治節の祝日に、シベリア鉄  
道を西へ西へと矢のように疾走する貨車で送られたの  
である。満州ではマンマンデーで一日走つては三日位  
停車していたのであつた。バイカル湖に停車して休憩  
し、再び矢のように走る。着いたところは、人口六十

万と言われるシベリア第一の都市で、帝政時代からのヨーロッパ風の街イルクーツク市であった。駅のホームでスイトンを作って夕食にしようとしていると、マーリンケ（子供）が寄って来て防寒外套のポケットに手をつ込んで来てうるさいので、乾パンの袋を地面に叩きつけたところ砂糖に蟻が群がるように集まってくるのである。よほど食料に困っていたのだろうと深刻に思ったものである。道を通る人は不具者や老人ばかりである。こんな国に負けてしまったのか、と驚くばかりであったのである。

我々は駅付近の倉庫のような所で、これもすつかりあばら屋のごとくであったが一泊して、郊外のイルミジョウという所にある収容所に収容されたのである。生木の松丸太で急造された収容所であった。四隅に望楼が建てられて警戒兵が監視していた。周囲は二重の鉄条網が張り巡らされ逃亡防止の構造で、四棟続きの収容所に衛兵所、便所、炊事場があるだけであった。

昭和二十年十一月十一日、奇しくも亡父の命日であったのであるが、この日に収容所生活の第一歩を踏

むことになったのである。筆者の亡父は、筆者が数え十八歳の冬十二月十一日、造り酒屋を失敗し小地主が自作農に転落して、十人の子供を持ち貧乏暮らし、五十五歳で急性肺炎でこの世を去り、遺言にお前はよく努めよと言いながら苦悶の末他界していったのである。それから何事もよく努めることが大切として今日に至っているのである。それで小生は、国家、社会に努めることを本分としているのである。そこで抑留もまたよく努めることが祖国のためと心の中に堅持していたのである。すべての国民が祖国を大切に努めれば総ての人が幸せになると信じている。そこで筆者は、亡父が乗り移ったように、軍隊ではやる気がなかったが抑留されてからは人間が変わったようになり活躍したのである。輸送中から目立って行動し、使役などにも積極的に出るようにしていた。

入所して一週間も食糧が与えられなかった。ソ連側では日本軍が食糧は持って来るはずだと言っているとのことであった。当時、日本の食事とソ連軍の食事では格段の差があったようである。我々同年兵は意気消

沈して気力を失い、どうなることかと不安におののいていた。しかし筆者は軍隊当時は警官であったがゆえ苛めに遭ったようで、事ごとに反目し不満が内在してやる気がなかったのである。これは筆者だけでなく、警官から召集された者は等しくそうであったようである。しかし途中で部隊が二分され、他分隊の幹部や憲兵などと混合されたのであった。筆者の分隊長は憲兵准尉の篠原新一という人であったが、この人が人格者で立派な軍人らしい人であったことから、上等兵であった筆者は、亡き父の遺言どおり何ごととも良く仕えるようにした。入所した冬は零下四十度にもなる屋外での穴掘り作業で地獄の苦しみであったが、事実、耐え難きを耐え忍び難きを忍び、身命を賭して働いたのであった。最も苦しく地獄よりも苦しいひと冬であったが、それはこれまで幾度か記述してきたところから省略するものである。

酷寒零下のシベリアの冬も越すことができ、シベリアの野に雲雀がさえずる陽春五月頃、年間三万台生産予定の自動車工場にアンガラ川から引く水道工事のた

めの測量の助手として指名され、戦友三人と計四人で出ることに成り、ソ連の歩哨もつかず精神的に楽であった。郷に入っては郷に従えということわざがあり、何としてもロシア語を話せるようにならなければと努力した。話しかけることによって親しみも湧いて来ることができ、人間性も理解され、毎日有意義に働くことができたのである。ソ連の一般地方人はとても人なつこく、人の良い人達であることも分かった。我々日本軍に同情的であったのである。

この作業も半年程で終了し、今度は収容所の丘から二百メートル程にある製材工場に行くことになったのである。この工場で作業する一日のノルマは、十一人程の作業隊で末口直径三十センチ、長さ六・五メートルの丸太を三十五本製材しなければ一〇〇パーセントにならず、従って一〇〇パーセントの食糧は与えられないのである。これまでにソ連当局のノルマ制や給食などについてはしばしば記述したところであり、一〇〇パーセントと言っても腹八分目にもならず、食べるあとから空腹で苦しめられたのである。初めて見る大

のこがディーゼルエンジンで動き、ドッドとものす

ごい音がしてドイツから占領したという製材機は旧形ではあるが作動しているのであった。これまでこんな作業はしたことがないのに、作業責任者としてせよとのことであつた。もとより亡父は遺言でよく努めよとのことであり、よし当たつて碎けようと覚悟を決めてこれに取り組んだ。ところが、末口三十センチ、長さ六・五メートルもある丸太を二メートルもある台の上上げるのは容易からぬことであつた。みんなでよいしょよいしょと力を合わせて押し上げるのであるが、上がらない。マッセルは「ヤボンスキーはヒートリーである、気合ばかりでニラポート（日本兵はかけ声ばかりで力を出さない）」と監督者のロシア人は言うのである。みんな苦しそうな顔をして、松丸太の肌についた白い皮をしゃぶるなどして頑張るが、とても一〇〇パーセントのノルマどころか、八〇パーセントもでない有様で、隊員の顔色が青ざめゆがんだ顔になり、日に日に痩せていくのが見えて来るのである。特に帝大出身者の隊員二人がおり、とても見るに耐えな

かつた。

よしと一計を案じたのである。どうせ敵国だ、ここで命を落としては犬死にである。集団で窃盗を思いついたのである。どうせ発覚しても俺一人犠牲になればよいと考えたのである。製材所に隣接して東側に、未だできないが火力発電所に使用するという三十センチ立方のカイ炭の石炭が貨車に山積みとなつて停車しており、二十両程の列車の前後には地方人の歩哨が実弾をこめた小銃を持って警戒しているのである。ソ連ではすべて国有財産である。だからその筋の者に見つからなければ見て見ぬ振りをしてるのである。しかし、ジャガイモをバケツに一杯盗んでもその筋の者に見つかれば強制労働の刑に処せられるのである。まして我々日本軍がこれを見つかれば、責任者は銃殺か無期の刑に処せられ永久に祖国には帰れないのである。しかしこのままでは遅かれ早かれオーカ（病人）になり死を覚悟しなければならぬのである。ソ連側では日本軍など人間と思つていない。簡単に銃殺してしまうのである。そして裸にして土の中へ埋めてしま

うのである。犬や猫のようにしてしまふのである。いつ帰れるか分からない、どうせ命を捧げて来た身である、のるか、そるかの問題である、独身であるとか覚悟を決め、古参兵は反対したが、隊員は筆者の計画に賛成し、よしやろうということになり、夜間に作業を決行することになった。

深夜ひそかに石炭を盗み、ジャガイモと交換することである。休憩時間に貨車から石炭を手渡しでどんどん運び、山のように出るオガクズの中に隠匿してしまつた。天佑神助であつた。ソ連の地方人の歩哨も深夜でまさか日本軍が石炭を盗むとは思つていなかったのか、それとも同情していたか、発覚しなかつたのである。第一段階は成功した。次はこの石炭をたくましい船員あがりの隊員が南京袋に詰めて大黒様のように担いで丘を越えて街に行き、ジャガイモと交換して来たのである。相当な量であつた。これを飯盒で湯がいてホクホクする湯気の立つものをうまい、うまいと言つて深夜の休憩時間に食したのである。ソ連人のラボーチ（機械を運転する男）はずでにうつ伏せとなり

眠っていた。彼も気がつかないようで、ジャガイモの入手については分からなかつたのである。腹が満たされれば血氣盛りの男達である。力も湧いてくる、ぐんぐんノルマも上がり、一〇〇パーセントはおろか一二五パーセント、一五〇パーセントまで上げたのである。綿羊の肉が入つた粟がゆが飯盒に半分程入つてくるのである。成功であつた。もうしめたものである、隊員の体力もつき、作業にも慣れて来た、厳しい冬を越し昭和二十三年の陽春がやってきた。石の上にも三年と言ふがよく言つたものである。

この頃筆者は弱冠三十歳の男盛りであつた。命がけで越えてきた苦難の道であつたのである。何ごとも命がけでやれば必ず成功するものである。

苦闘・苦心のピラランマー（製材工場）の作業も春とともに交代し、トラックで一時間走り、煉瓦工場の作業に今度は六人程の少人数で、ビスカノボーイ（ソ連の歩哨がつかない作業責任者）として出かけることになつたのである。昭和二十二年の五月頃で、姫リンゴの花が咲く頃であつた。シベリアの野に雲雀がさえ

ずり陽炎が燃え、そよ風が吹く頃であった。ここで風の歌を紹介すると、

風よ歌えよ楽しき風 春の風

遠く世界をめぐりし風 春の風

誰も知るその歌を 吾れに歌え

春の風 春の風――

と、有名な歌であるという。もう大丈夫である、どんな苦しみにも耐える尊い体験を身につけることができるのである。

昭和二十二年五月頃、今日は煉瓦工場の煉瓦をトラックに積み込む作業で、単純な作業であった。隊員は七人程で、筆者の最も信頼できる戦友だけの、ソ連の歩哨がつかないビスカノボーイの作業隊であった。

苦しい困難なピランマーの作業を成績をあげて半年間やった慰労のようでもあったのである。その工場にはドイツ軍の捕虜で女性の若い隊員が働いていた。なかなか理知的なキリリとした顔をしており、我々日本軍に対して好意的であった。またウクラナイ方面から強制移動させられたという少女達も働いていた。この

人達はドイツ軍に協力した疑いで移動させられたと言われていた。これは家族ごと移動させられたとのこと、シベリアの各所に移動させられ、少女達はまた小中学生のいたくない子供達であった。

ある日、隊員に頼まれて煉瓦工場の入口にある売店のマガジンに黒パンを買うように言われたので行つたのである。我々はこれまで、ロシア人が国有財産の石炭などをトラックで盗みに来て我々に積ませることがあった、それは駅のホームであり夜間に来るのであるが、積み込ませると金をくれるのであった。製材工場の作業を交代し二週間程駅の石炭作業に出たことがあり、その時の金を後生大事に持っていたのであった。

煉瓦工場の入口にあるマガジンにお昼頃行つたところ、若い労働者風の男が、これもウクライナ方面から来た男達であったが、筆者を見てヤボンスキーと言って一人が背後から抱きしめ、他の一人がいぎなり筆者の口にウォッカと思われるものをついで来たのである。初めて口にするロシアの酒である。彼等はハラショーと言って立ち去って行つた。小生はいい気持ち

になり、工場脇の畑に、これは姫リンゴ畑でソフホー  
ズ（国营農場）であったが、ここでもお昼休みなの  
か、十二、三の少女たちがトランプをして遊んでい  
た。小生はこれを見ているうちにそこに眠り込んでし  
まつたのである。目を覚まして見ると少女達はいなく  
なり、太陽が西に傾いている。さあ大変、隊員が心配  
して待っているだろう。当時ソ連では、我々が逃亡す  
ると銃殺されるのであった。それは我々戦友の前で死  
体を見せつけ逃亡防止のためにするのであった。隊員  
のところへ戻ると平素笑顔で怒ったことのない戦友が  
火のようになって怒っていたのである。無理もないこ  
と、もう帰る時刻に近づいていたのである。幸いソ連  
の歩哨がついてないのでよかったです。小生は手  
をつかんばかりに謝って、事情を話して了解しても  
らったのである。小生は常日頃、小間使いのように怒  
ることと威張ることは絶対しないと固く心に決めてい  
た。そして犠牲的精神を堅持して、心の中ではあくま  
でも警官であることを忘れなかったのである。筆者が  
警官を拝命した頃の教育は、大君の警察官として国民

より一步天皇陛下に近づき、陛下の赤子たる国民を守  
るのであるとし犠牲的精神を叩き込まれて育ったので  
あった。金が欲しかったらそちらに行けと言われ、大  
楠公の遺訓、七度生まれ変わって国賊を滅ぼすという  
固い信念で任務を全うするよう心がけていたのであ  
る。当時の我が国の軍隊とはとてもかけ離れていたの  
である。

煉瓦工場の作業も五カ月程で終わり、今度は、人口  
六十万といわれているシベリア第一の都市の電力を賄  
う火力発電所の石炭作業に三十人程の作業隊の責任者  
として行くことになったのである。もう入ソして足か  
け三年になり、石の上にも三年と言われているが、地  
獄のような環境にも慣れてきて、収容所にも入浴場も  
理髪所もでき、衛生も完備され虱や南京虫などの被害  
から免れ、日曜日には演芸会が催されるなど楽しみも  
求めることができたのである。しかし火力発電所の作  
業は最初はソ連の歩哨がついたのであった。しかも兵  
ではなく下士官であった。これらのソ連の歩哨は次第  
に下士官から兵になりビスカノボーイとなったが、昼

夜二交代で他の作業隊と交代となるので、最初はなかなか嚴重であった。この作業は昭和二十二年十月から翌二十三年三月頃までのひと冬であった。イルクーツクの火力発電所は、長い大きな煙突が六基もあって、遠くからも見える大規模なものであった。当時は廃墟になっていたが、大きなモスク（教会）が隣接してあり、映画で見るヨーロッパの風景そのものであった。

火力発電所の作業は、トラックで終始運搬されて来る石炭をおろす作業や、貯炭場の上にクレーンが装置されており、石炭を巻き上げて、十メートル足らずの高さに鉄骨で組まれた上にレールが敷かれてトロッキがあつて、その中に巻き上げた石炭が自動的にあけられるようになっており、トロッキがこれも自動的に窯の中に石炭が運ばれてあけられるようになっていたのである。我々の作業はこれらの単純な作業であつた。貯炭場には五人程の者がクレーンで巻き上げられる石炭を寄せ集める作業であつた。石炭が燃焼して灰となり、これと共に水が混ざり泥水になって出てくる薄暗いトンネルのような中で作業は地獄の底で作業をし

ているように思えたが、我々にはさせなかつた。

昼夜二交代での作業隊であつたが、夜間作業が終わると収容所まで送り迎えるトラックが出るのであるが、ソ連の歩哨がつかなくなつてから送り車がなかなか出ない。疲れているのに空腹をこらえて休憩所で待機し三十分も一時間も待たされることがしばしば出てきた。ある朝一時間も送り車が出ないことから皆イライラしていた。筆者は休憩所から出てマッセル（監督）にどうして車が出ないのかと言うと、ワイナブレイン（捕虜）のくせに待っている、一言二言言い争っているうちに喧嘩となつてしまつたのである。小生は拳闘のように突いて来るマッセルの腕を取り背負い投げで投げ飛ばしてしまつた。さあ大変、マッセルはのびてしまい、休憩室のドアが破られ隊員がドヤドヤと出て、火力発電所の従業員と揉み合う騒ぎとなつてしまつた。幸いマッセルは起き上がつてスゴスゴと自分の控えの室に入つて行つた。小生は隊員に歩いて帰ろうと言うと、そうだ、そうしようと言つてくれたので、小生が先頭になつて門を出ようとしたとこ

ろ、カントーラから所長らしい偉い人がヨッポイマーチと悪い言葉で怒鳴り出て来る。地方人の歩哨が小生に銃を向けて来た。小生は撃つと言つて構えた。これを見て所長らしい人は飛び出して来たのだらう。結局、送りの車が出て来て我々は収容所へ帰つたのであつた。その翌日発電所へ行くと、マッセルがラポーチに格下げされて働いていた。ソ連では良いことをするとすぐ昇進し、間違いを犯すと容赦なく降格させられるのである。いずれの企業にも共産党員が労働者となつて働いており、信賞必罰であつた。この発電所の作業で波乱があつたがどうやら問題にならず、六カ月の間これを務め、隊員にも異常なく、交代することになつた。こうして六カ月位で次々と作業が変わつていったのも理由があつたのであらうと思つた。

昭和二十三年の春四月、今度は年間三万台の自動車を生産するという工場の建設に普通の作業員として出ることになつた。火力発電所のマッセルとの乱闘事件が影響したのかも知れないが、責任のない普通の作業員は精神的に呑気であつた。小生は警官となるまで農

業をやり、土木工事に出たこともあり、労働はお手のものであつた。五月頃に入るとハラシヨラポーターは帰れるとの噂が流れて来た。良く働いた者は帰れるということであつた。事実、その通りであつた。小生は誰よりも真先に帰れるものと思つていた。ところがある日、ソ連の政治部将校のもとに呼び出された。君は日本で特高警察官ではなかつたかと言うのである。入所していた最初の頃、分隊長の篠原憲兵准尉から警官の前歴は身上書に書かないように、農業としておく方がよいと言われたのでその通りに出しておいたのである。当時、憲兵、警察官は反動である、これ密告した者は早く帰してやるとのことであつたと言われ、部隊の中の同年兵が密告したものと思えたのである。筆者はあくまでも外勤巡査で現職一年で召集されたと言つたが、当時、我が国の共産党徳田球一書記長からスターリンに指令が送られ、憲兵、警察官はプロレタリアートの敵だから永久に帰さないようにとのことであつたという。有名な徳田指令である。

やがて十一月七日の革命記念日が終わると帰還者の

名前が呼ばれて、呼ばれた者は天にも昇る思いで喜々としていた。筆者の名前は呼ばれなかったのである。

これまでに誰よりもよく働いてきたつもりであったが、これもやむを得ないことである。運命の神はそう易々と問屋がおろさなかった。これからもまだ苦闘屈辱が待っていたのである。帰還の戦友は、思い出深い収容所を後に、長い苦闘屈辱を乗り越えて喜々として帰れるからと力をつけてくれる。地獄の苦しみを耐え抜いた戦友同志達であった。生死を超越した仲間であったのである。手を振って後ろを振り返り振り返り見えなくなるまで見送るのであった。残された者はこれからどうなるのだ。いよいよ酷寒の冬がやって来る。灰色の空から氷雨が降ってくる。残された我々もその翌日出発し、再び西へ西へと運ばれて行くのである。約三年足らずの苦しい抑留生活で思い出深いイルクーツク第六収容所を後にしたのである。

我々はチェレンホーボの炭鉱の収容所に送られた。そして憲兵、警察官だけの作業隊となり、北海道警察

本部の浅川巡查部長が作業隊長であった。憲兵曹長もいたが隊長に指名されてなかった。我々の仕事は、炭鉱の仕事はさせなかった。収容所から三キロもある所の鉄道線路上にディーゼルエンジンで電気を起こす発電機の機械が貨車のように連結されており、これも戦利品のようであったが、この機械を格納する建物を作る基礎工事であった。

最初は穴掘り作業であったが、もう十月ともなれば地下一メートルは鉄よりも固い凍土となっており、ノルマも一立方メートルであった。しかしもう石の上にも三年で要領を得ており、土の上で火を焚いて作業に取りかかる前に一服していると三十センチ程解けるのである。この表土を簡単に掘り、更に火を焚くとまた三十センチ程解けるので、容易に一日のノルマは立派に仕上がるのであった。イルクーツクで入所当時はそのことを知らず、鉄のような凍土を鉄棒を握りドスンと一日中打ち下ろし地獄の苦しみであった。何事も経験が大切である、人生のすべてが経験の集積なのである。体験者が語ることは率直に、しかも謙虚に

これを聞かなければならない。浅川巡查部長は筆者に作業隊長をやってくれと言って、真新しい綿入れの上着を渡すのであった。警官は小生と二人で、あとは皆憲兵であった。最も上官の高見憲兵曹長も「吉ちゃん、やれよ」と言って笑顔を向けている。イルクーツクではソ連の歩哨の犬を二人で食った仲で、親しい人でもあった。よし引き受けた、と言って作業隊長をやった。もう今年の冬はとて越せないと覚悟していた。しかし神仏は見捨てなかつた。辛うじて越すことができ、うらかな陽春が再びやってきたのである。

穴掘り現場から更に四キロは離れているだろう、砂取りに行くことになった。真新しいスコップの員数外を見つけ、よしこれをロシア部落に持っていきジャガイモと交換しようと思って、隊員に話をして持って行くことにした。もうソ連当局では我々が逃げ隠れもしないと思っていられない。幸いビスカノボーイで、ソ連の歩哨がついていない。起伏の多い丘をロシア部落めざして行った。幸い七、八戸の小さい農家集落があったので、立ち寄ってスコップとジャガイモを交換

して欲しいと言うと、人の良さそうなロシア人が笑顔で南京袋に半分程入れてくれた。心の中でシメタと喜んで、大黒様のようにこれを担いで帰って来た。途中で一服して腰を下ろした。ところが、遠くを眺めているうちに、何のために、誰のためにこんなことをしなければならぬのか、馬鹿馬鹿しい、逃げよう、逃げてノモンハンで捕虜になった日本軍が、捕虜は銃殺であることを知っているの、コルホーズ(集団農場)を営んで暮らしているそうであると、次から次と魔がさすというのだろう、考えてしまったのである。ふと脇を見るとインチューホアが吠えている。きれいだと言った花の好きな小生は見とれているうちに、亡父が、馬鹿者、帰れ、帰るのだ、と心の中に出て来たのである。はっと気がつき、こうしてられないと急いで帰ると、遠くでスコップを叩いて高見憲兵曹長が万歳万歳と叫んでいる。高見曹長は、あれからハバロフスクに小生を送られ、更に戦犯容疑者として他の収容所に送られて祖国に帰ったが、今は他界されている。

小生は急いで帰り、ジャガイモの成果を見せた。隊

員は早速飯盒で湯がいて、湯気の立つものをうまい、うまいと言って食べている。小生はぐつと胸が熱くなり、涙がこみあげてくるのをどうしようもなかったのである。抑留されて満三年と六カ月になるが、食うことしか楽しみがなかった。いずれも結婚適齢期を過ぎている青年ばかりである。しかも前途有望の秀才ばかりである。妻帯者は浅川巡查部長と高見憲兵曹長だけである。何としても祖国へ生きて帰らなければならぬいと固い決意を新たにするのであった。

昭和二十四年四月頃と記憶しているが、ソ連の高級将校が我々に訓示し、諸君は我が国ソ同盟の労働学校を卒業したと言うのである。何を言うかと反発したが、今考えてみると、昔から若いときの苦労は買ってもしろと言われている。これ程の苦労はほかにないだろう。おかげ様で草を食うても生きていけるという自信がついたのである。戦友の中には、これはダモイの挨拶だと言う者もいたが、小生はまだまだ帰れないと思った。案の定、チェレンホーボを出発することになったのである。雄大な眺めのバイカル湖を過ぎ、雲

つくばかりのウラル山脈であろう、紫色に輝く実に美しい眺めである。どこまでも続く花園、初夏の風が爽やかに頬をなぞる。

思い出深いイルクーツクを過ぎて、着いたところはハバロフスクの炭鉱で、ライチハという所であった。昭和二十四年六月頃である。こんな収容所もあったのかと思う程設備の整った収容所であった。しかし南京虫に襲撃されて閉口したが、これも一週間ほどで出なくなった。食堂で音楽を聞きながら食事ができるし、バーニヤ（浴場）も完備されており、マガジン、レストランもあった。我々は一般住宅の補修作業であった。一カ月もすると別に大したことがないのに入院することになった。疲れ休みみたいなものであった。キツネにだまされたようでもあったのである。立派なベッドに清潔な寝具が備えてあり、枕元には唯物史観とかソビエト人民が歩いてきた道などの厚い本が並べてあり、さあ読んでくれといわんばかりである。小生は別にこれを読もうとはしなかった。マルクス主義者の帝大出身のえらい人と枕を並べてイルクーツクでは

いろいろと教えられてきており、既に足かけ五年も共産主義の本家本元で命がけで働かされてきているのである。彼等の意図するところは嫌というほど実践してきた。どうしても共産主義にはなじめない。なぜならば、スターリンの行った行動はナチスドイツのヒットラーと何ら変わりがなく、また我が国の軍閥の行動と何ら変わりはないのである。弱肉強食であることは何れも同じであると決めつけているのである。むしろ我が国の神を敬い、仏の教えを信じ、正義・人道を守ることを最も正しい道なのである。

筆者は、昭和二十四年八月頃再び作業に出ることになり、水道管布設工事に出ることになったのである。寄せ集めの作業隊で、作業責任者をやる者がいないので、よし俺がやると言って名乗り出た。副隊長は元陸軍大尉であった。水道管布設工事は地下三メートルを掘り下げて布設するので、なかなか容易に作業できなかった。しかし砂地で石がないので、思ったより楽であった。三メートル掘ると今度は横穴を掘って隣の者につなぐのである。体力の弱い者などや病気がかりの

戦友は横穴で休憩してもらい、その分はマッセル（監督のロシア人）に交渉し、ビドロタスカイ（水が出るので水を汲み上げたことにする）として、ナリヤード（作業成績）を書いてくれた。おかげで三十七ブリガータのうち上位の成績を挙げることができた。我々によくしないとまた戦争に来るぞ、とおどかすと、マッセルも笑ってブライナー、ブライナー（そうだ、そうだ）と言っていた。

日曜日になると反動吊るし上げが行われた。満州国の建国大学教授とか北海道警察部長など、偉い人が引き出されて自己批判せよと憎々しそうな顔をしたアクチーブと称する者が吊るし上げをやっている。何を考えているのか、同じ同胞ではないか、はたから見ていると浅ましい輩にしか見えない。彼等は祖国へ帰って何をしているだろうか、疑わしいものである。

昭和二十四年十一月下旬頃、待望のダモイが発表され、帰還者名簿に載り、晩秋のシベリア鉄道の貨車でナホトカ港に到着して、帰還船「栄豊丸」七千トンに乗船して舞鶴港に上陸したのである。しかし栄豊丸の

中で赤旗組と日の丸梯団と称するものと対立抗争事件を起こし、赤旗組は要求貫徹と称して上陸拒否をしていた。日の丸梯団は自分勝手にさっさと上陸してしまつた。中立の立場をとつた筆者は当局の指示を待っていた。甲板の上に出て御指導をいただいた帝大出身の方々にお礼の挨拶をして船倉に下りてみると、天皇陛下の一類兵器であるとした飯盒や水筒、後生大事としていたものが紛失している。日の丸組の仕業であると怒りを覚えた。結局赤旗組と昭和二十四年十二月四日上陸したのであるが、上陸して何気なく名簿を見たところ、名前の上に赤丸がついていた。この時は別に気にも止めていなかったが、後で舞鶴駅から生家に帰る列車の中で、隣の座席に明らかに小生を監視に警察官らしい人が座っているのであつた。終始無言でいたが、我々帰還者の一人が突然立ち上がり、我々は赤い糸でつながっているのであると演説を始めた。赤旗組だと思つた。次にこれを制止するように小生が、上陸してみると日本新聞の記事とは明らかに相違しているようである、まず肉親のもとへ帰って温かい懷に抱か

れ、状況を見て行動すべきである、と演説した。

筆者は上越線越後川口駅まで。新潟署とともに勤務していた今は亡き先輩の加藤喜一氏とはハバロフスクで出会い、また今は他界された高野賢一氏も同じ署で勤務していたが、両氏ともこれからもよろしくと言つて別れた。後で三人で県警に挨拶に行くのであるが。

筆者を越後川口駅まで迎えに来てくれた長兄と同級生の役場職員の方と駅前の旅館で休憩しているいろと語り合い、足かけ七年の長い間別れていたので何から話せばよいか迷う程であつた。やがて越後川口駅から飯山線に乗り換えて十日町駅まで行こうと三人で旅館を出発して駅まで行くと、中兄や分家のいとこ達がわざわざ十日町から川口駅まで来てくれていた。涙が出るほど有り難かつたのであつた。国破れて山河あり、生きてこうして再会できる喜びは体験した者でないとう理解できなかつた。もう再び会うことはないだろうと決意も新たにしてお出発したのである、おそらく再び会うことはできないだろうと思つていたのであつた。十日町駅に着くと村人や同級生、親類縁者、三十軒もあ

る分家の者達で、戦いに敗れた我が国は安泰なりと喜んでたものであった。十日町駅から我が生家城之古に行くと、村人が夕闇の中、よかった、生きておられてと喜んでくれるのであった。七十戸ある集落から戦死者が二十人も出ている。大戦争であった。

我が家はかつて名主、庄屋をやり、平安時代から続く家であり、亡父が造り酒屋をやって失敗したとはいえ体面は保っていた。小生は三男坊で、いらん蔵で育った問題児であった。分家のせがれは何も余計なこととは言わないほうがよいと言っていたが、小生は「聞くところによると多勢の戦死者が出ている、幸いにして私はこうして生還してまいりました、この体を再び世の中のために最善を尽くします、どうも有り難うございました。」と礼を述べて我が生家に帰り、母の胸に今帰ったと手をやると、分家の者達が涙を流していた。従兄弟の陸軍大尉が、お前にやる田畑はなくなつた、皆共産党に取られてしまったと涙を流して、お前も一度警官の服を着てくれと言う。シベリアの話をしてくれと言うからしたところが、共産党になつてし

まったと思つていたらしい。分家のせがれが共産党になつていたのであった。足かけ七年の空白はあったが、我が郷里は昔からの気風そのものであった。よし再び警察官として身命を世の中のために捧げようと覚悟を新たにしたのである。

約一カ月静養して、翌年昭和二十五年一月、県庁に復職の挨拶に赴いたところ、良い所があったらそちらへ行つてほしいと言われたのである。ねぎらいの言葉とてなかつた。これはどうしたことかとあ然とするばかりであった。やっぱり舞鶴の引揚者名簿の赤丸がたつていたのである。誤解も甚だしいと思つたが頭を下げて復職をお願いしたのである。舞鶴で上陸拒否した赤旗組と日の丸梯団との抗争で新聞などにも出たそうであるが、帰還者名簿の頭に赤丸がついていたことで注意人物と見られてしまい、帰還列車の中でも後で分かったが稲田警部補が監視して同席しており、共産党の同調者と見られてしまつていたのである。

復職しても事ごとに色目で見られていた。足かけ七年の空白もあり、現任教育が二カ月あったが、教室が

暖かいのと氣候が変わり、教官の話が子守歌のように聞こえて眠気がさし、とても耐えられなかった。現任教育が終わり国家地方警察新潟地区警察署に配置となり警務係を命ぜられたので、ただ黙々として任務忠実に励んだおかげで署長に真面目さを認められたが、ソ連帰りで赤丸がたり、署員には色目で見られているような気がしてならなかったのである。あとの烏が先になり監督者になって号令をかけられ、後輩に頭が上げられなかった。自分の弟のような若輩に敬礼をしなげればならず、国のために長い間苦闘屈辱を受け、九死に一生を得て帰って来ても何ら恩典を受けず、下積み生活で馬鹿馬鹿しい毎日であった。警察教修所を三位も下がらずに卒業し、召集を受けず、また終戦後すぐ復職した者は監督者になって幅をきかせているのである。しかしシベリアの凍土に裸にされて永眠せしめられた戦友のことを思えば喜ばなければならないと心の中で決意し、任務の自分に尽くさなければならぬと専心したのである。

新潟地区警察署が廃止となり、白根地区警察署へ配

置され司法特務を命ぜられた。ようやく警察の本番とすべき任務に就き、よしやるぞという意気込みであった。その後、水原警察署、新潟中央署勤務を経て交番勤務となり、四カ所の交番を次々と務め、最後に中央交番の責任者として務め上げ、何としても民警の協力体制の確立が最も大切であるとして防犯と少年非行防止に重点を置き、受持ち市民の協力を得るため防犯連絡所だよりを防犯協会長に諮りこれを発行して市民の要望意見を載せ、交番としての希望意見も載せて各戸に配布し、防犯標語を作り暴力追放、少年非行防止など専ら防犯ポスターを掲示するなど、防犯活動の推進に努め好評を得たのである。

昭和五十年三月三十一日をもって円満退職となった。警察では色目で見られたが、民主警察官であるとして、手前味噌であるが受持ち市民の信頼を得て百貨店の食堂を借り切って盛大の送別会を開催していただき、感謝状や記念品をいただき身に余る光栄の至りであったのである。復職して二十五年、軍隊、シベリア抑留と足かけ七年、新任一年と、計三十三年の勤続で

あった。

これまでに長々と記述し今回で八回目、八年も抑留体験記を書き続けてきた。終わりに、シベリアの凍土に眠る戦友の御冥福を心より祈念するものである。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正七年一月二十四日

出生地 新潟県中魚沼郡川治村大字城之古

出生地は現在、町村合併により新潟県中魚沼郡川治村大字城之古となっている。

世帯主は、兄 高橋清三郎、九十三歳。家業は農業を営んでいるものである。高齢で、長男 清一が跡を継いで十日町農協に勤務している。

出生地、川治尋常高等小学校高等部を卒業し、家事農業に従事していたが、昭和八年十一月一日から鉄道省信濃川発電工事事務所の給仕として勤務し、昭和十一年八月三十一日付で退職し、同九月一日東京工学院土木科に補欠入学したが、同年十二月二十日健康を害し中途退学し、生家に帰郷し静養し、健康回復して農

業のかたわら発電工事に労働した。

昭和十七年五月一日付で新潟県巡査を拝命し、教修所を卒業し、同年九月一日付で新潟警察署に配置され外勤係として勤務した。

昭和十八年十月五日、会津若松東部二十四部隊に召集入隊した。同年十月二十日、満州東安第一三八七部隊に転属した。昭和二十年八月八日四平街移駐で出発し、同八月十日四平街指導学校に駐屯した。同八月十五日終戦により武装解除を受け、楊木林兵舎で待機し、同九月二十七日満鉄に乗車し、同十月三十日黒竜江を渡り、ソ連ブラゴエシチェンスクに三日露営してシベリア鉄道に乗り、イルクーツク第六収容所に入所した。これは昭和二十年十一月十一日であった。

イルクーツクでは測量の助手、製材工場、煉瓦工場、発電所の石炭作業などの作業をやらされ、昭和二十三年十一月初旬チェレンホーボの炭鉱に送られ建築の基礎工事をやり、翌昭和二十四年六月下旬頃ハバロフスクに移送され建築、水道管布設作業などをやり、昭和二十四年十一月中旬頃ナホトカに移送され、帰還

船栄豊丸七千トンに乗船し、同十一月四日舞鶴に上陸して帰郷した。

昭和二十四年十二月中旬、新潟県庁に赴き復職の挨拶をなし、新潟県巡査として復職した。

昭和五十年三月三十一日付をもって円満退職した。軍隊・シベリア抑留足かけ七年、警察官二十六年、合計三十三年三カ月であった。その後会社員として十年働き、現在無職である。八十二歳八カ月となる。健康である。

(新潟県 長谷川 八郎)

## 抑留記

富山県 中葉 正義

氷見市地蔵町、紺野六平の三男として大正十三(一九二四)年八月二十九日出生。家業は漁業及び鮮魚販売。昭和六(一九三一)年、上伊勢尋常小学校入学。十二年、南土小学校高等科入学。十四年、卒業。

昭和十九年十月、現役として広島、村上旅館へ集合し、十一月一日、満州牡丹江省、満州四五三部隊輜重大隊に入隊。入隊時、地下足袋でしたが、入隊後、中古の長靴が当たりました。

昭和十六年の大動員にて牡丹江に多くの兵士が集合させられ、ほとんど南方面へ移動させられた後へ我々が入隊したので、部隊はがらんとしていました。入隊は三個中隊でした。

終戦は安東にて知りましたが、当地は離れていたため状況が分かりません。

七九旅団全部安東市外におり、毎日、特攻隊の訓練に励んでおりました。安東にて特攻訓練中で、その時はただただ呆然としていましたが、これで訓練をしないで済むとほっといたし、今後はどうなることかと心配しました。

現地召集の方は解散しましたが、不穩の状況のため再び軍隊へ戻りました。大連方面の方は無事行かれたようです。私は在満でないので、そのまま軍隊に留まりました。